



“宇宙を視座に大人が変わる 子どもが輝く 美しい星が生まれる”【子どもと宇宙と未来をつなぐ】



那覇市はしぞら公民館
「宇宙の学校®」開催模様

2024年度の幕開けは、何といっても元旦に発生した能登半島地震ではないでしょうか。新型コロナウイルス感染症が落ち着き、社会生活がコロナ禍前に戻りつつある中、本日に衝撃的な出来事でした。また、能登半島は、9月に豪雨にも見舞われ、2つの災害からの復旧が急務となっています。子ども・宇宙・未来の会でもそんな地域に生活する子どもたちに夢を与え、明るい未来につながる事業を実施していきたいと思案し続けた1年間でした。

さて、子ども・宇宙・未来の会の大きな事業である「宇宙の学校®」も、コロナ禍前に少しずつですが戻り始めています。しかし、残念なことにコロナ禍を経て、止めてしまった地域があることも事実です。KU·MAとしては、開催頂いている主催者の方とより連携を深め、充実した内容にしていくように努力した1年でもありました。また、新規開校を目指す動きも進めました。具体的には、福島県内では初の大熊町での「宇宙の学校®」を開催する運びとなりました。次年度以降、三重県四日市市や北海道札幌市での開校を目指して宇宙教育指導者セミナーの実施を計画しています。

2024年度を振り返って

副会長 稲葉 茂

「宇宙の学校®」事業もスタートして16年が経ちました。今までの取り組みを振り返ると長く継続いただいている地域の方々向けにも、開催サポートとして、最新の教材紹介や改めて「宇宙教育の理念」を再確認いただき、今後の活動につながるサポートを行いたいと考えています。

その理由は、今の子どもたちを取り巻く教育環境にあります。GIGAスクール構想が具体化し、児童生徒一人一台の情報端末が配備される時代となりました。そこでの弊害は、直接体験の減少です。

私たちが展開している「宇宙の学校」は、直接体験の宝庫です。教材との対話、保護者との対話、仲間との対話。様々な対話を通して学べる機会を提供しています。各主催者の皆様へどのように教材と対話し探究心を育てるためにはどうしたらいいかを周知することが必要だと実感した1年間でもありました。

最後に、昨年度から取り組み始めた「AWS In Communities 助成事業」です。具体的には、相模原市内の不登校児童や児童養護施設の子どもたちを対象に「宇宙の学校」で使用している教材で科学することの楽しさを実感してもらう事業です。参加した施設や子どもたちから大変好評をいただき、今年は、開催施設を増やして実施しました。昨年実施した施設では、参加人数が倍増するなど、この事業を次年度以降、全国展開していければと考えています。

認定NPO法人の更新時期を迎え、会員皆様のご支援、ご協力のおかげで無事に更新することが出来ました。寄付金の獲得に一層の努力をし、活動資金を得て、次年度も全国のより多くの子どもたちに「宇宙教育の理念」を届けられるように努力してまいります。引き続き、会員の皆様からの温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。



菊地涼子理事 突撃インタビュー
『自らと向き合い創作へー上坂浩光さん』

探査機「はやぶさ」の初号機がいくつかの危機を乗り越え、7年をかけて小惑星「イトカワ」からサンプルを持ち帰った時の感動。今も鮮明ではありませんか？「はやぶさ」を世に知らしめるきっかけとなったのは、帰還前から上映されていたプラネタリウム映像『HAYABUSA -BACK TO THE EARTH-』でした。この映像を製作したのが KU·MA 理事で会員でもある上坂浩光さんです。今回は上坂さんへのインタビューをお届けします。